実践報告

精神科急性期治療病棟における看護師の患者の捉え方の変化
―患者の＜長所・強み＞に焦点を当てた アセスメント検討会を通して―

上原勝子[1]　池田明子[2]　當山冨士子[3]

【目的】看護師が患者の問題点のみに着目せず、患者の＜長所・強み＞に焦点をあてたアセスメントを行うことで、患者の捉え方がどのように変化したかを明らかにし、看護師のアセスメント能力の向上のために示唆を得る。
【研究方法】研究協力者：M精神科病院のN病棟に勤務する、本研究に同意の得られた看護師７名。方法：①研究協力者は、筆者自作のストレングス・アセスメント用紙（以下、アセスメント用紙）を試用し、看護記録に添付した。②研究協力者は受け持ち患者1名の事例を提供し、患者の＜長所・強み＞に焦点をあてたアセスメント検討会を３回実施した。③アセスメント検討会の内容は参加者の同意を得て録音し、逐語録を作成した。④逐語録から、事例提供者が患者の問題点を捉えた部分と＜長所・強み＞を捉えた部分を取り出して、看護師の患者の捉え方の経時的な変化を一覧表にした。
【結果】研究協力者は、アセスメント用紙の試用により、『患者の良いところ探しをしよう』など、患者の捉え直しが始まった。アセスメント検討会の中で、ある看護師は、最初に、参加者から母親の＜長所・強み＞について意見が出たことで、母子関係を広く捉えることができた。さらに、看護師は、患者の粗暴行為の傾向や内面について、患者と母親との関係性が影響しているかもしれないなどと推察した。このように、看護師が、アセスメント検討会で意見交換を進めた結果、受け持ち患者の捉え方の過程を確認できた。
【結論】1. 看護記録に添付した筆者自作のアセスメント用紙の試用は、研究協力者のストレングス志向への動機付けの一助になった。2. アセスメント検討会は、患者を問題点のみでなく、患者の＜長所・強み＞にも、意識的に目を向ける機会となり、研究協力者の対象の捉え方に広がりと深まりが生じた。3. ストレングス志向の事例を持ち寄って患者のアセスメントを検討する方法は、看護師のアセスメント能力の向上に役立つことが示唆された。

キーワード：精神科看護師、患者の＜長所・強み＞、アセスメント用紙、アセスメント検討会

Ⅰ．はじめに

精神科急性期治療病棟に入院している患者は精神症状が活発であり、自傷他害などの危険行動や、食事や洗面などの基本的日常生活動作もできなくなるなど、症状以外においても、様々な形で問題が表在化する。患者の安全および生活を守ることは、優先される看護上の視点であり、精神科急性期看護では、問題解決に焦点が絞られがちである。

M精神科病院の看護計画マニュアルでも、「問題点は、目標達成に向けて、障害となっている事を抽出し、優先順位を決める」と示されており、患者の問題点のみに着目することを重視する傾向がある。

しかし、看護師は入院患者の生活および症状の改善に大いに影響力をもつ存在であり、看護師が患者の問題点のみでなく、患者の〈長所や強み〉に焦点をあててアセスメントの視野を広げることは、看護師の患者理解と新たな視点での支援方法を導く上で意義があると考える。

チャールズ・A・ラップら（2008）は、ストレ

[1] 医療法人天仁会　天久台病院
[2] 沖縄県立看護大学
[3] 元沖縄県立看護大学

ングスに焦点をおくことは、動機付けを高め、また、ストレングスに着眼し患者の力を引き出すことは新しい支援体制に繋がるとも述べている。

近年の精神科看護における先行研究では、施設利用者と希望や目標を共有した援助計画を立てて看護実践をおこなった結果を述べた小澤（2009）の研究や、患者のストレングスに焦点を当てた支援をリカバリープロセスに照らして述べた西垣（2007）の研究、患者のストレングス視点を捉えて社会復帰施設への退院支援の事例について述べた神里ら（2009）の研究がある。また、長期入院患者で退院困難患者のストレングスに焦点をあてた事例検討の効果については、明間（2013）の学会報告もある。

精神科救急・急性期病棟においても、瀬戸屋ら（2010）によって、ストレングスモデルを活用した、早期に支援を開始するケアマネジメントの有効性を検討した報告がある。

しかし、精神科急性期治療病棟において、看護師がストレングス志向を活用することにより、患者の捉え方がどのように変化するかに着眼した研究は見当たらない。

本研究の目的は、看護師が、問題点のみに着目せず、患者の〈長所や強み〉に焦点をあてたアセスメントを行うことで、患者の捉え方がどのように変化したのかを明らかにし、患者アセスメント能力を向上させるための示唆を得る事である。

用語の操作的定義

ストレングス志向

本研究において、ストレングス志向とは、看護師が患者の〈長所・強み〉を観ようとする考えや気持ちの方向性のこととした。

Ⅱ．研究方法

１．研究協力者（表１参照）

研究協力者は、M精神科病院のN病棟に勤務し本研究に同意の得られた看護師７名（男性３名、女性４名）であった。年代は30～50代（平均41歳）、精神科経験年数は５～19年（平均８年）であった。

２．期間

平成24年４月～平成24年９月

３．方法

１）研究協力者を募集する前に、M精神科病院施設長および同病院看護部長とN病棟看護師長に、研究の趣旨を説明し承諾を得た。

２）研究協力者の募集は、M精神科病院N病棟のカンファレンスで、２日間、各10分程度、本研究の趣旨について口頭で説明した。その後、ナースステーション内の掲示板に研究協力者募集のポスターを、１週間、掲示した。研究の依頼に応じた看護師は、筆者に直接連絡する事とした。

３）研究の依頼に応じた看護師に対し、研究内容と倫理的配慮について説明し同意を得た。

４）研究協力者は、各自の受け持ち患者全員を対象に、筆者の作成したストレングス・アセスメント用紙（以下、アセスメント用紙とする）を用いて、患者の〈長所・強み〉を記録する事とした。

このアセスメント用紙の作成には、チャールズ・A・ラップら（2008）のストレングス・モデルのストレングスの種類（性質・個人の性格、技能・

表１．研究協力者の背景

研究協力者	性別	年代	精神科経験年数
N１	女	40	8
N２	女	40	19
N３	女	30	9
N４	男	30	5
N５	男	40	5
N６	女	50	5
N７	男	30	5

才能、環境、関心・願望）と、瀬戸屋ら（2011）のアセスメントシートを参考にした。用紙には、看護師自身がストレングス志向で患者を捉え直す発見を体験できるように、敢えて細かな項目を設けず、２つの項目に絞った。項目のタイトルは、［患者本人のやりたい事・やってみたい事］、［患者本人・家族の強みや長所］とし、いずれも自由記載とした。

アセスメント用紙の試用については、筆者が口頭で以下の点について説明した。

① ストレングスとは、〈長所や強み〉であり、〈長所や強み〉はそれを捉えた時点でアセスメントになること。

② ［患者本人のやりたい事・やってみたい事］の欄には、本人の思いや言葉をそのまま記載してもよいこと。

このアセスメント用紙は、平成24年８月から９月までの２カ月間、試用した。

５）アセスメント用紙の試用を始めた２週間後より、アセスメント検討会を３回行った。

＜アセスメント検討会の進め方＞

目的：看護師のアセスメントの視野を広げることとした。

場所：病棟内のプライバシーの守れる場所で行った。

開催時期：２週間に１回、計３回とした。

参加状況：３回とも参加した研究協力者は４名、２回参加した研究協力者は１名、１回のみ参加した研究協力者が２名であった。

時間：日勤終了後に行い、１事例に約１時間を要した。

事例選定：各研究協力者は、自分の受け持ち患者の中から、自分のアセスメントについて、他の研究協力者と検討会で話し合いたい患者１名を選定することとした。

進め方：

①アセスメント検討会では、最初に、事例提供した研究協力者が患者紹介を行った。

②患者紹介では、事例提供した研究協力者が、カルテやアセスメント用紙をもとに、患者の看護計画で挙がっている問題点と、アセスメント用紙の活用で捉えた患者の〈長所・強み〉を紹介した。

③その後、アセスメント検討会に参加した研究協力者全員で、患者の〈長所・強み〉に焦点をあてたアセスメントの内容を検討した。

④筆者は、ファシリテーターとなり、全員が発言しやすい場を作り、アセスメントの検討が円滑に行えるようにした。

記録：毎回、参加した研究協力者全員の同意を得てICレコーダーに録音した。

４．分析方法

１）アセスメント検討会で事例提供した研究協力者毎に、逐語録を作成した。

２）逐語録の中から、事例提供した研究協力者（以下、看護師とする）が、患者を問題志向で捉えた部分とストレングス志向で捉えた部分を取り出した。また、看護師以外のアセスメント検討会参加者（以下、参加者とする）が、患者を問題志向で捉えた部分と、ストレングス志向で捉えた部分を取り出した。

３）２）で取り出した部分を、看護師の発言と、参加者の発言を経時的に並べ、看護師の患者の捉え方の過程を図示した。

４）図に基づいて、看護師の患者の捉え方の過程を分析した。

５）分析した結果を、指導教授のスーパービジョンの下に、精神保健看護の大学院生を含めて検討した。

５．倫理的配慮

本研究は沖縄県立看護大学研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号12010）。

Ⅲ．結果

１．アセスメント用紙の試用

研究協力者が、２カ月間に受け持った患者の人数は、１人あたり２名～６名（全26名、平均3.7名）で、アセスメント用紙は、研究協力者の受け持ち患者全員に試用された。

アセスメント用紙は、意志疎通がスムーズでない患者では、［患者本人のやりたい事・やってみたい事］の記載がない事が多く、意志疎通が可能な患者では、本人の言葉を使って記載されている事が多かった。

また、研究協力者が、アセスメント用紙を試用する時の思いや考えについて、次のように述べていた。Ｎ１は、『患者の言動を中心に受け止めた』、Ｎ２は『良かった探しをしよう。何かないかなぁと思って、頑張った』、Ｎ３は『ストレングス志向で見るのは難しかった』、Ｎ４は『見方を変えてみようと思って観た』であった。

２．看護師のアセスメント検討会における受け持ち患者の捉え方の過程（表２参照）

表２は、各７名の看護師の受け持ち患者の捉え方の過程を要約し、検討した結果を一覧表にして示した。

表では、左から順に、［事例提供した看護師がアセスメント用紙の試用で捉えた患者の〈長所・強み〉］、［参加者との検討で起こった事例提供した看護師の患者の捉え方の過程］、［検討結果］を記した。

その結果、Ｎ１とＮ３は、患者と家族の関係について新たな情報を得ていた。また、Ｎ５は、施設入所している患者ｅさんにとって病院が一時休息の場になっていることに気付き、Ｎ６は、患者ｆさんは家族以外にも学校も支援の力になることに気付いた。Ｎ４は、患者ｄさんの〈長所や強み〉の新しい情報を得ていた。以上の看護師５名は、参加者から意見を得て〈長所や強み〉に新しく気付かされた過程があった。

Ｎ２は、参加者の意見を得て、母子関係が変わった可能性について再検討したことで、Ｎ２自身が、患者ｂさんの行動の背景を推察し、患者ｂさんの思いに気付く過程があった。

Ｎ７は、参加者の意見や疑問に対して、実際のエピソードなども加えながらストレングス志向で補足説明を加えて発言しており、Ｎ７自身の変化は見えなかった。

３．Ｎ２のアセスメント検討会における患者ｂさんの捉え方の過程（図１参照）

本研究では、Ｎ２の患者の捉え方の変化を、代表例として取り上げて結果を述べる。

図１は、右側に［Ｎ２（事例提供者）の発言］を経時的に記した。左側には、Ｎ２の患者ｂさんの捉え方に刺激となった［検討会参加者の発言］を記し、それぞれの関連を矢印で結んだ。

【Ｎ２の背景】

Ｎ２は40代女性、精神科経験年数は19年である。

【患者紹介の時のＮ２の患者の捉え方】

患者ｂさんは、30代女性、急性期治療病棟には、２週間前に開放病棟から移動してきた。

Ｎ２が問題志向で捉えた患者ｂさんについて、『入退院と病棟移動を繰り返していて良い情報が無い』『幻聴に左右されている』『粗暴行為がある』『患者と母親に対し先入観であまり良いイメージが無い事』の４点をあげた。

アセスメント用紙の活用で捉えた患者の〈長所・強み〉は、『この１週間、粗暴行為が無い』『妄想の訴えが執拗でなくなった』『今も、空笑も独語も徘徊もあるが、それなりに保たれている』『母親に助けてもらっていて有り難いなどの言葉が聞かれた事』の４点をあげた。

Ｎ２は、アセスメント用紙を試用した時の心構えを『患者ｂさんの良かった探しをしよう、何かないかなぁと思っていた』と説明した。

表２．看護師のアセスメント検討会における受け持ち患者の捉え方の過程と検討結果

検討過程／看護師	事例提供者した看護師がアセスメント用紙の試用で捉えた患者の〈長所・強み〉	参加者との検討で起こった事例提供した看護師の患者の捉え方の過程	検討結果
Ｎ１	（患者ａさん、20代女性） ・自分の好きな事が分かって話せるようになった ・水商売のリスクが考えられるようになった ・祖母父や母親思いである ・今回の入院で、不安を表出できるようになったのが一番の収穫である	1. 参加者から、患者ａさんが母親の愛情を感じないとも話していた等の情報を得て、母親の情報に目を向けていなかったことに気付いた 2. 参加者から、今の入院環境は、患者ａさんの本音を出しやすい環境との意見を得て、最初は心を閉ざしていた患者ａさんに見守っている事を伝える関わりから始めた事を振り返り、自分と患者ａさんの関係を整理した 3. 参加者から、Ｎ１が患者ａさんの母親の役割代理を担っていた事と、患者ａさんが母親の愛情を求めていたのだろうとの意見を得て、そのことに気付いた 4. 参加者から、患者ａさんの母子関係が密着しているとの意見を得て、そのことに気付いた	患者ａさんの〈長所や強み〉に着目して捉えていたが、母親の情報、影響、密着した母子関係について、参加者の意見を得て気付いた
Ｎ２	（患者ｂさん、30代女性） ・この１週間粗暴行為が無い ・妄想の訴えが執拗でなくなった ・今も、空笑も独語も徘徊もあるが、それなりに保たれている ・母親に助けてもらっていて有り難いなどの言葉が聞かれた	1. 参加者から、患者ｂさんが母親を批判しないことが一番の評価であると言われ、その場面を振り返り、患者ｂさんの〈長所・強み〉を再確認した 2. 母親が患者ｂさんの事を他人事のように話した時の良くない印象を思い出したが、参加者から、母親自身も精一杯かもしれないとの意見を得て、母親の〈長所・強み〉に気付いた 3. 参加者は、同胞の成長が母子関係を改善させたかもしれないと推察したが最近まで粗暴行為があったことから、母親との繋がりもまだまだと判断した 4. 参加者から、患者ｂさんは誉められて育っていないかも…との意見を得て、粗暴行為は幼少期からのパターンで、物に当たることで周囲に見て欲しいかもしれないと推察した	患者ｂさんの言動に着目して捉えていたが、検討によって、母との絆もまだまだであるとか、粗暴行為は見て欲しい思いかもしれないと患者の内面を推察した
Ｎ３	（患者ｃさん、50代女性） ・世話好きである ・入院患者の相談に乗る事も多い ・美容関係の資格がある ・復職を希望していること	1. Ｎ３が捉えた患者ｃさんの〈長所・強み〉の具体例を出したり、人との距離が適切に取れずトラブルにもなる事実について、参加者とＮ３がお互いに確認しあった 2. その場の適応力は高いが社会性が無いとアセスメントできる。でも、入院前の生活レベルが分からず、目標を決めるための情報がないと気付いた 3. 参加者から、状態が良い頃の生活状況の情報が必要であるとの意見を得て、そのことに気付いた	患者ｃさんの言動を、ストレングス志向と問題志向の両方から見ているが、参加者の意見を得て、必要な情報が不足していることに気付いた
Ｎ４	（患者ｄさん、30代女性） ・長期に隔離状態が続いているが、開放観察中に環境の変化に徐々に順応出来た ・周囲の様子を見ながらアプローチ方法を見つけられた ・約10年、両親が、決まった日に面会を続けている ・患者も面会の日を理解し楽しみにしている	1. 参加者から、開放観察中に恋愛感情を持った事と、相手の異性が病棟移動した後に逸脱行動があったと情報を得て、女性としての感覚や感性があると気付いた 2. 参加者から、暴力の対象が人から物になった事は、人との交流が思い出されたとの意見を得て、そのことに気付いた 3. 参加者から、患者ｄさんなりの対人関係のストレス対処が、症状として出ていたのだろうとの意見を受けて、そのことに気付いた 4. 参加者から、医療側も隔離処遇の長い患者ｄさんを開放観察できたことや患者ｄさんとの関係作りが出来たとの意見を得て、そのことに気付いた	患者ｄさんの〈長所や強み〉に着目して捉え直し、さらに検討会でも、参加者から新しい〈長所や強み〉についても意見を得て、気付きが増した
Ｎ５	（患者ｅさん、40代女性） ・人との関わりを、楽しめていると言う ・症状が訴えられる ・入所中の施設側が決めた細かな日課に基いて、自分の要求が出来る ・作業療法の活動に興味を持っている ・家族が対応してくれる ・車いす生活であるが、風呂以外のＡＤＬは自立である	1. 参加者から、失禁が増えたことの意見があり、施設の都合で決められた細かな日課は好ましくなく、患者は関われば関わる程、機嫌がよくなり頓服も必要としない程である事をＮ５が参加者に説明した 2. 参加者から、施設探しで苦労した患者ｅさんにとって、病院は休息の場所として位置づけられるとの意見を得て、そのことに気付いた 3. 参加者から、失禁が増えている事が患者なりの対処である可能性もあると意見を得て、そのことに気付いた。	患者ｅさんの言動の傾向や、家族や施設などとの関係も捉えていた。さらに、入院を患者の休息の場であると、参加者の意見を得て、気付いた
Ｎ６	（患者ｆさん、10代女性） ・衝動行為を振り返る事ができる ・母に愛情を受けていると表現できる ・人のアドバイスに耳を傾けることができる ・人の痛みに同調できる ・友達が多い ・自分の意見が言える	1. 参加者から、親や周りに対して見捨てられ感があるとの意見を得て、亡くなった実父に「生まれてこなければよかったのに」と言われていた事を思い出し、患者の表面的な対応に気付いた 2. 参加者から、家族や彼氏から暴力を受けていることの情報を得て、患者は自立したいとも思っていることを思い出し、強みになると気付いた 3. 参加者から、学校が熱心に関わっているとの意見を得て、他の支援として学校の力があることに気付いた	患者ｆさんの話した事や、Ｎ６が率直に感じたことを、〈長所や強み〉として捉えていたが、他にも学校も支援の力になることを、参加者の意見によって気付いた
Ｎ７	（患者ｇさん、30代男性） ・スポーツが上手 ・屋外でスポーツをするなど体を動かす事が好き ・症状があっても保清ができる ・キーパーソンの親戚が熱心である	1. 参加者から、疎遠だった母親らが、最近面会に来るようになったとの発言があり、面会時の嬉しそうな表情や様子について補足説明した 2. 参加者から、スポーツ後の薬の副作用の出現は良くないのではないかと意見を求められ、スポーツの楽しみや他の患者を気遣う様子などを説明し、患者ｇさんの好きな事を優先する支援の根拠について説明した 3. 参加者から、職員の方が安易に保護室を使っているのではないかとの意見を得て、それを支持した。さらに、以前、患者ｇさんから友達になりたかったという理由でＮ7がコーヒーをかけられたエピソードを話し、患者ｇさんの気持ちをよく知る必要があると説明した	元々、患者の〈長所や強み〉について焦点をあてて捉えており、新たな気付きは無かった

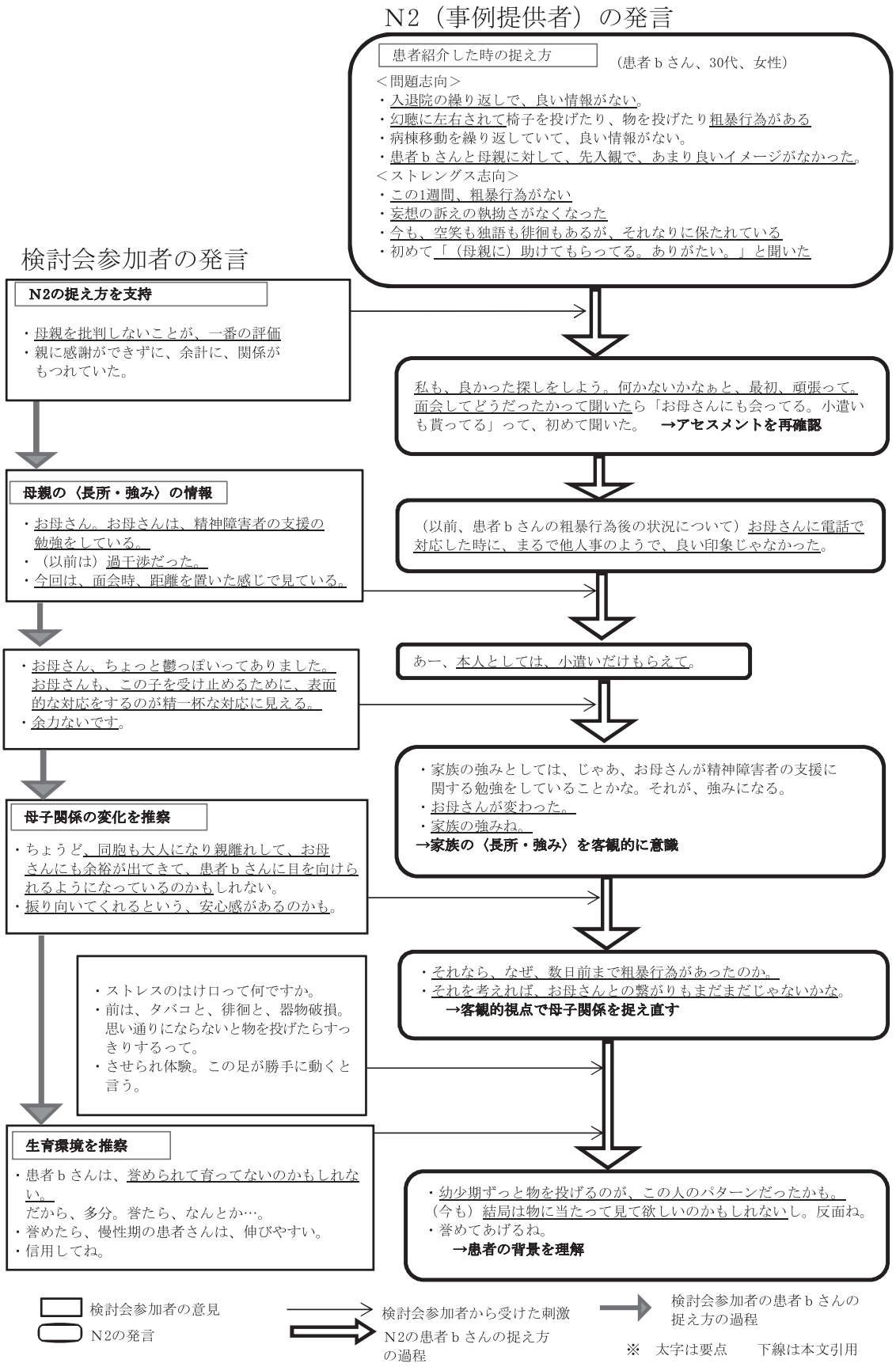

図１．Ｎ２のアセスメント検討会における患者ｂさんの捉え方の過程

【参加者との検討で起こったＮ２の患者の捉え方の過程】

まず、参加者から「患者ｂさんが母親を批判しない事が、一番の評価」と支持され、Ｎ２は、『私も、良かった探しをしよう。何かないかなぁと、最初、頑張って。面会してどうだったか聞いた。』と、自分が患者ｂさんの母親への思いを引き出した場面を、再度、振り返って説明した。

次に、Ｎ２が『お母さん、（中略）まるで他人事のようで良い印象じゃなかった』と発言した事で、参加者から母親に関する情報として「お母さんは、精神障害者の支援について勉強している」「過干渉だった」「今回は、面会時にも距離を置いた感じで見ている」「お母さん、鬱っぽいってありました」「この子を受け止めるために、表面的な対応をするのが精一杯である」「余力ない」などが挙がった。Ｎ２は、それらに対し、『本人としては小遣いだけもらえて』『お母さんが変わった』『家族の強みね』と答えた。

その後、参加者から、「同胞も大人になり、親離れして、お母さんにも余裕が出てきて、患者ｂさんに目を向けられるようになっているかも」「振り向いてくれるという、安心感があるのかも」という意見がでた。しかし、Ｎ２は、『それなら、なぜ、数日前まで粗暴行為があったのか』『それを考えれば、お母さんとの繋がりもまだまだじゃないかな』と答えた。

参加者は、患者ｂさんのストレスのはけ口について意見交換した後、「誉められて育っていないのかもしれない」と意見が出された。Ｎ２は、『幼少期から、ずっと物を投げるのが、この人のパターンだったのかもしれない』とし、また、『結局、物に当たって（自分を）見てほしいのかもしれない』と推察した発言があった。

Ⅳ．考察

１．アセスメント用紙の試用の効果

看護師がアセスメント用紙を使い始めた時の考えや思いについて、『良かった探し』や『見方を変えて』などの積極的な発言があったことは、看護師のストレングス志向の心構えとなり、患者を捉え直す基点になったと考える。

Ｎ２の場合、当初の患者ｂさんの親子関係が良くないと考えていた自分のアセスメントを見直そうと、直接、患者ｂさんに確認する行動を起こしている。さらに、Ｎ２は、自ら引き出した患者の母親への思いを聴いて驚き、患者の〈長所・強み〉を発見した体験ができたことは、Ｎ２が抱いていた患者ｂさんら親子に対するイメージを大きく転換したものと考える。

本研究で試用したアセスメント用紙が自由記載であったことが、看護師に、患者の新しい面を観てみようとか、自分がこれまで考えていた患者の見方を変えてみようという動機付けの一助になったと考える。

また、アセスメント用紙を記録用紙として看護記録と一緒に添付していたことは、患者の〈長所・強み〉を、看護師があらためて見直したり、整理したりする手段として有効だったと考える。

２．〈長所・強み〉に焦点をあてたアセスメント検討会の有効性

小谷野ら（2005）は、多施設の看護師が集まって行われる事例検討会の中で、事例を知る同僚や知人の参加と補足発言は、参加者のイメージを広げるとともに、事例提供者に検討グループへの安心感や信頼感を与える支持的な役割があると考察している。また、事例提供者が自分自身の感情を率直に表現できるという安全感や安心感を保障するようなグループ作りが重要と述べている。

本研究でのアセスメント検討会では、同じ病棟内の看護師同士で、お互いに受け持ち患者の情報を共有し合っている臨床現場での検討会であるこ

とが前提条件となっている。どの事例についても、同じ対象を参加者がそれぞれの違った視点で捉えていたことが、受け持ち看護師だけでは捉えられなかったところまで視野を広げる効果があったと考える。

浅原ら（2005）は、ネガティブな情報を持つ事例をもとに紙上患者を作成し、事例検討会を実施したところ、看護師の情報に対する印象が、暴力的、怖いなどの否定的な印象から、表現力の未熟、コミュニケーションが下手などの患者の内面をみる印象に変化した結果を得ている。その効果の一因に、グループで討議して患者の問題を整理し多角的にとらえることで、印象が変化すると考察している。

本研究においても、N１とN２が患者と母親との関係性に気付いたり、N４が患者の症状や粗暴行為の背景に気付いたことは、看護師が患者の内面に目を向け、さらに、患者の捉え方を深めていったものと考えられる。特に、N２の場合、患者の言動の背景を自ら推察し気付きを深め、捉え方が変化していた。アセスメント検討会で参加者とともに多角的に捉えられる過程があったことで、患者の捉え方を深める効果につながったと考える。

さらに、本研究のアセスメント検討会では、アセスメント検討会に臨む前に、参加した看護師全員が、アセスメント用紙を試用したことで、積極的に患者を捉え直そうとする動機付けがされていた。また、参加者全員が、事前に患者のアセスメントの視野を広げる目的意識を共有していたことと、ストレングス志向で患者を捉える体験をした者の集まりであったことが、その効果を挙げた誘因になったと考える。

最後に、今回は、一病棟内の試みだったことが本研究の限界であるといえる。しかし、本研究で実施したアセスメント用紙を活用したアセスメント検討会の取り組みは、問題志向に偏らず、ストレングス志向でも患者を捉えることにより、看護師の患者アセスメント能力の向上に役立つ事が示唆されたと考える。

Ⅴ．結論

1．看護記録に添付した筆者自作のアセスメント用紙の試用は、研究協力者のストレングス志向への動機付けの一助になった。
2．アセスメント検討会は、患者を問題点のみでなく、患者の＜長所・強み＞にも、意識的に目を向ける機会となり、研究協力者の対象の捉え方に広がりと深まりが生じた。
3．ストレングス志向の事例を持ち寄った患者のアセスメントを検討する方法は、看護師の患者アセスメント能力の向上に役立つことが示唆された。

謝　辞

本研究の実施を承諾していただきましたM精神科病院施設長、看護部長、N病棟師長に感謝いたします。また、ご多忙な勤務の中、研究に協力して下さいました研究協力者の皆さまに深く感謝を申し上げます。なお、本稿は、平成24年度沖縄県立看護大学保健看護学研究科博士前期課程の課題研究の一部である。

引用文献

明間正人（2013）：統合失調症患者のストレングスに焦点を当てた事例検討－精神科看護師を変える試み－，第23回日本精神保健看護学会抄録集，80-81.

浅原佳紀，尾崎敏也，三木明子，村上謙一（2005）：精神科看護師の印象を変える事例検討－ネガティブ情報に対する印象の内容の変化－，日本看護学会論文集　精神看護，36，249-251.

チャールズ・A・ラップ，リチャード・J・ゴスチャ（2008）/田中秀樹（2010）：ストレングスモデル　精神障害者のためのケースマネジメント　第２版，79-97，128-150，金剛出版，東京.

神里隆，平良一，宮城勝秀，仲座健，金城智美，小禄康代，大城安枝（2009）：看護者がストレングス視点を用いて　意欲のない患者が自信をもつことで見せた変化，日本精神科看護学会誌，34巻，154-155.

西垣里志：長期入院患者の自立への第一歩　ストレングスに焦点を当てたかかわりがもたらした自己決定能力の高まり，日本精神科看護学会誌，50(2)，534-538.

小谷野康子，日下和代，熊地美枝，高濱圭子，板山稔，宮本真巳（2005）：精神科領域の事例検討会における事例提供という体験の構造，日本精神保健看護学会誌，14(1)，53-62.

小澤壽江（2008）：精神科リハビリテーションにおける援助の考察　利用者がいきいきとした生活を送れるようにストレングスモデルとICFの概念を取り入れた評価表を使用した援助の実際，日本精神科看護学会誌，51(3)，209-213.

瀬戸屋雄太郎，高原優美子，吉田光爾，前田恵子，佐藤さやか，高橋誠，佐竹直子，伊藤順一郎（2011）：精神科救急・急性期病棟におけるケアマネジメントのあり方に関する研究.
http://www.ncnp.go.jp/nimh/fukki/documents/CM2.pdf（2014年２月13日現在）
http://www.ncnp.go.jp/nimh/fukki/documents/CM4.pdf（2014年２月13日現在）

Journal Of Okinawa Prefectural College of Nursing No.15 March 2014.

Changes in nurses' perceptions of patients in acute psychiatric wards through case review meetings focused on "strong point" of patient

Katsuko Uehara[1] Akiko Ikeda[2] Fujiko Toyama[3]

Abstract

【Purpose】 To elucidate how nurses' perceptions of patients changed by conducting assessments centered on patient "strong point," instead of only focusing on patient problems; and to obtain suggestions for improving the assessment abilities of nurses.

【Study methods】 Collaborators: Nurses working in the acute ward of psychiatric hospital A whose consent to participate in this study could be obtained.

Methods: 1) Seven nurses whose consent was obtained trialed an assessment sheet created by the author and attached this sheet to nursing records. 2) All nurses provided an example of one patient under their care and held three case review meetings with a focus on patient "strong point." 3) The content of the review meetings was recorded with the participants' consent and transcriptions of the content were created. 4) Parts of the transcriptions where the case provider identified patient problems and patient "strong point" were extracted and analyzed. Temporal changes in the perceptions of patients of seven nurses were analyzed from illustrations and rendered as a list.

【Results】 The re-evaluation of patients such as "trying to find the good aspects of patients" began through the utilization of the assessment sheet.In the case review meeting, a nurse was initially able to broadly acknowledge the mother-child relationship of a patient in the review meeting and she was subsequently able to surmise the relationship between the patient and her mother, the patient's temperament, and her tendency for violence that was an outlet for her stress. As a result of advancing the exchange of opinions at the review meeting, the process by which nurses' perceptions of patients under their care changed was identified.

【Conclusion】 1) The assessment sheet trial enhanced nurses' motivation to look at patient "merits and strengths." 2) The case review meeting not only focused on patient problems, but was an opportunity to consciously look at "merits and strengths," resulting in broader and deeper understand of patients by nurses. 3) This study suggested that case review meeting for strength-oriented assessment of patients was able to improve the assessment skills of nurses.

Key ward: psychiatric nurse, patient "merits and strengths," assessment sheet, case review meeting

[1] Medical corporation Tenjinkai Amekudai Hospital

[2] Okinawa Prefectural College of Nursing

[3] former Okinawa Prefectural College of Nursing